

# マイナビ進学会員定期調査12月

## ——有識者インタビュー——

3か月に1度実施しているマイナビ進学会員定期調査。

2022年12月に実施した調査結果では、未だ学問選びや将来の職業検討が進まない高校生の様子が垣間見えた。

高校生の進路検討について、日本キャリア教育学会全国理事である吉本圭一氏に意見を伺った。

### 現時点で学びたい分野が 決まっていないことはむしろ健全

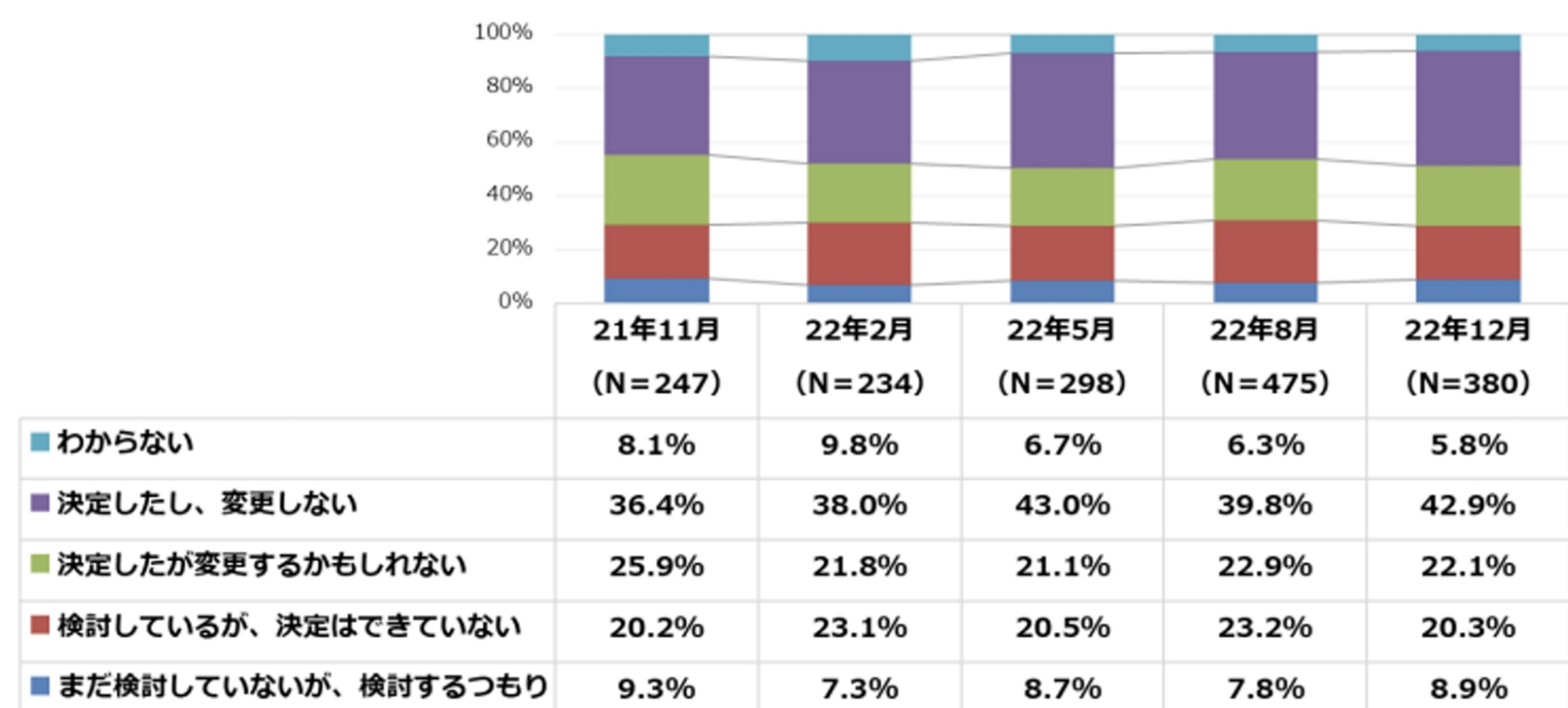
**青木** マイナビ進学総合研究所では、マイナビ進学会員である高校生に「マイナビ進学会員定期調査」を行っています。主に進路検討状況を調査しており、定点観測することで学年や時期による進路検討の進捗を明らかにしています。2022年12月の調査結果では、“進学先で学びたい分野・系統”を「決定したし、変更しない」または「決定したが変更するかもしれない」と回答した高校2年生は60.8%となりました。この点について吉本先生のご意見をお伺いしたいと思います。

**吉本** よろしく申し上げます。

**青木** 高校の進路指導では、2年生の段階で学部選びを進め、3学期にはある程度志望校群を固め、3年生になると同時にスムーズに受験勉強を開始できるようにする学校が多いと思います。特に、進学率が高い高校ではこのような指導スケジュールが一般的ではないでしょうか。その点、12月の調査結果では学びたい分野・系統が未だ定まっていない2年生が約4割いるということになります。これに対し、先生のお考えはいかがでしょうか。

#### ■ 進学先で学びたい分野・系統の検討状況

現高校2年生の回答



出典：2022年12月実施マイナビ進学会員定期調査

#### 話し手



**吉本 圭一氏**

日本インターンシップ学会 会長  
日本キャリア教育学会 全国理事  
日本高等教育学会 理事  
九州大学 名誉教授  
滋慶医療科学大学 医療管理学研究科 教授  
※本文中敬称略

#### 聞き手

**青木 湧作**

マイナビ進学総合研究所 研究員

**吉本** 約4割が未確定だということは逆に健全だと思います。中央教育審議会が2018年に出した答申（「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」）では、教育機関の多様性を確保することの大切さが説かれています。他方で学位の名称に付記する専攻分野の名称が約700種類にまで増加しており、学位プログラムごとにある程度共通なグルーピングできないか、という話も出ているほどです。

**青木** 確かに、どこで何を学べるのかよくわからないという高校生の声も聞きます。加えて、データサイエンスをはじめ新たな学びの領域も増えてきています。

**吉本** この状況からみれば高校生が学問を探究することはとても大変なことです。学びたい分野・系統が定まっていない約4割の高校生がいることについては何ら不思議ではありません。進路検討で重要なことは、学問選びに加えて社会に出てどんな人材としてどんな活躍をするかを含めて考えること。教学マネジメントの観点では学修成果の可視化も課題とされていますが、そういったところまで意識すると今の高校生はなかなか決めきれないのだろうと思います。

## メンバーシップ型労働市場では 仕事に直結した学問選びは難しい

**吉本** また、大学側は各分野で学ぶ内容を明確に発信しますが、学びのその先にどういった仕事と繋がるか、どのように社会で活かせるかを表現することは少し難しい。メンバーシップ型の労働市場でみると、どの学部を卒業しておく必要があるかといった制約はほとんどないわけです。例えば経済学部でも法学部でもその卒業生たちは多種多様なホワイトカラーになっているのですから、仕事ごとに必要な学びには大きなギャップがないのです。医療・福祉系といった国家資格の養成課程では話が別です。そういった分野への進学希望者は思い切って進路を決めればいい。しかしそれ以外の分野では高校生は悩まざるを得ませんし、逆に大いに悩めば良いのだと思います。

**青木** それではなおのこと、高校生は何を軸に学問選びを考えればよいのでしょうか。将来の仕事とは直結しなくとも、学術として興味を持てるかどうかを重視すべきでしょうか。

**吉本** 純粹に学びたいことを選べばいい、という考えもありますが、その選び方では入学4年後に自分が希望する仕事の発見ができるのかという懸念もあります。私自身、日本職業教育学会や日本インターンシップ学会で学修成果と職業能力との関連について研究しています。そこでの研究から、インターンシップなどで職業に触れて自分のキャリアの方向性を意識することが、ぜひとも必要だと認識しています。学術としての興味だけで進路選択をすると、キャリアの方向性を意識するのが遅くなるような気がします。

## 本来的には、 社会で活躍するために学んでほしい

**吉本** 特に人文社会系の分野では、約半数の卒業生は自分の専攻と直結した職には就いていないという調査結果もあります。長く大学の現場にいる私の立場からすれば、大学で学んだ内容はやはり社会に出て使ってほしいと思います。高校生には、自分が好きなことを勉強するという選択と同時に、社会に出てその学問が活かせるかどうかという点まで意識してほしい。こんなことを学んだらウキウキするな、それを学んだ先にどんな仕事や活かし方があるかなど、そこまで考えてほしいなと思います。

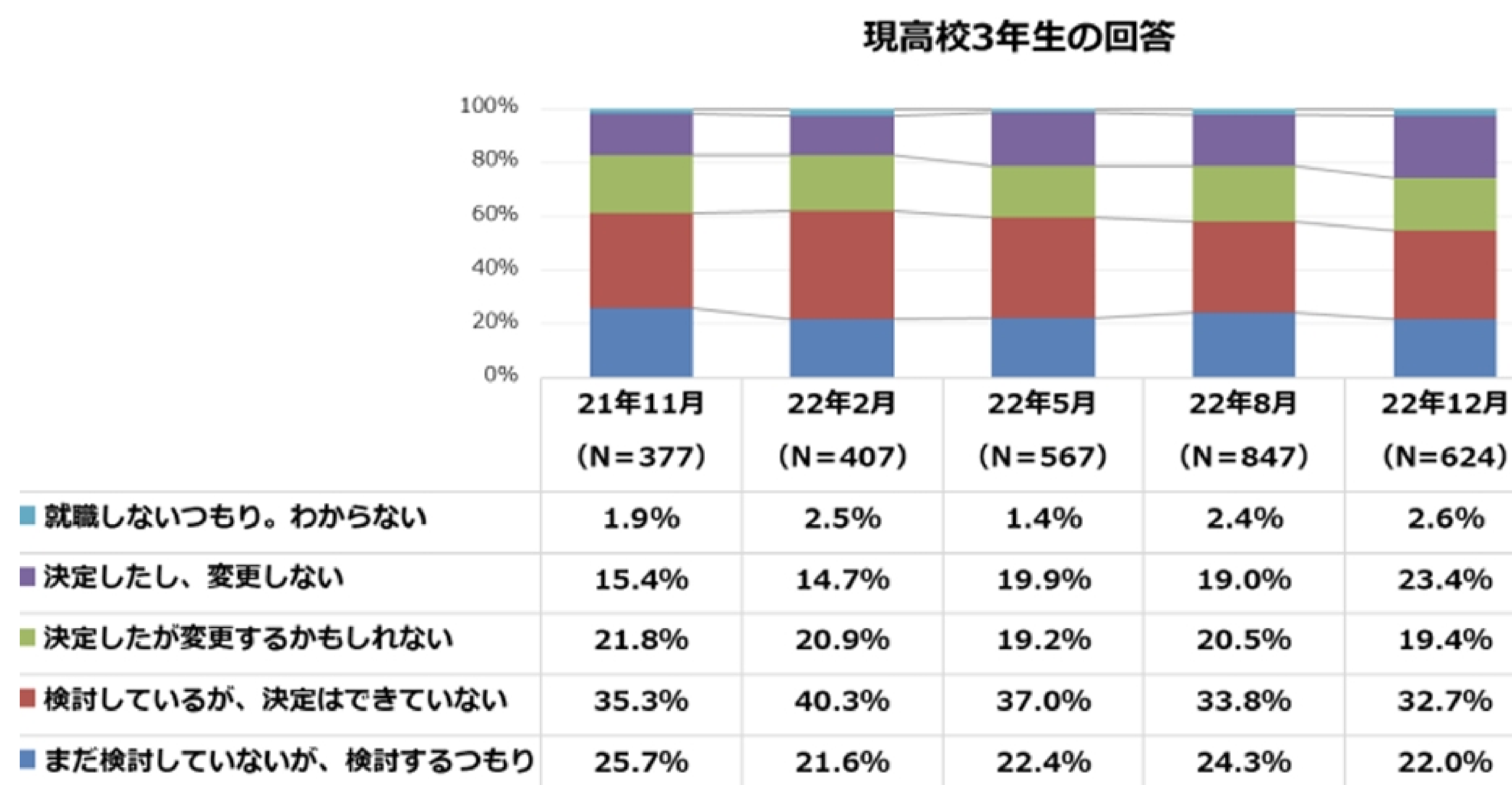
**青木** ウキウキ、というのは大事ですよ。経済産業省の「未来人材ビジョン」（未来人材会議「中間とりまとめ」として2022年公表）でも、「好きなことに夢中になれる教育への転換」に向かうべきだと示されていました。

**吉本** 特に学問というのは、高度になればなるほど普遍性のある内容になります。文脈に依存しない知識を獲得していくことが学校での学びです。しかし実社会で活かされる知識とは、文脈ありきなのです。建築学を活かして建造物を作るといっても、それが北海道なのか沖縄なのか、作る目的は何なのかといった文脈次第で、必要となる知識や前提、またその高度さも変わってきます。学びを活かしたい文脈を意識していれば、学ぶべき内容もまた明確になります。研究者になるなら話は別ですが、やはり多くの学生には、社会に出ることを見据えて学んでほしいと思います。

## 高校の間にどこかで 職業に触れてほしい

**青木** 先生のおっしゃる通り、進みたい学問分野がどのような職種や業界、仕事と関わりが深いのかは同時に検討した方が良いと感じます。一方、12月の定期調査では“将来就きたい仕事”を「決定したし、変更しない」または「決定したが変更するかもしれない」と回答した高校3年生は42.8%となりました。必ずしも仕事を確定する必要はないですが、半数以上の高校3年生が将来の職について未定・未検討のまま進学するのだな、と感じます。高校生は職種や業種の情報収集をどのように行えばよいか、先生のお考えはありますか。

### ■ 将来就きたい仕事の検討状況



出典：2022年12月実施マイナビ進学学会員定期調査

**吉本** 職業に触れるということを経験生活のどこかで必ずやってほしい。工業科などの専門学科がある学校ではインターンシップが広く普及していますが、普通科ではほとんど行わ

れていません。実施するとしても就職希望者のみ対象といった状態です。大学や短大、専門学校に進学する高校生が“将来就きたい仕事”を「まだ検討していない」という回答があることは、寂しいことです。

**青木** そうですね。「まだ検討していない」と回答した高校3年生は22.0%でした。

**吉本** 前述のとおり、進んだ学部からその先に就く仕事は多種多様。医学部から漫画家になる人だっているくらいです。だからといって「仕事は進学してから考えればよい」というわけではなく、高校生の段階で検討はしてほしい。高校の先生には、ぜひ学校以外の仕事の現場の人と交流を持つ機会をもっと用意してほしいと思います。

**青木** 高校生が仕事を検討する際には、どのように情報収集をすべきでしょうか。特にインターンシップを実施していない学校の生徒であれば、リアルな情報に触れるのは少し難しいと感じます。

**吉本** インターンシップでなくても、高校の先生には仕事の場での学習機会をもっとコーディネートしてほしいなと思います。地域の企業や地域の社会人、あるいは大学生と話す機会など。高校生は学習の場を学校だけに縛られる必要はなく、家族など何かしらの繋がりを通して学ぶということも大切だと思います。

## 学校広報では 進学のその先の幅広さを示し安心感を

**吉本** 先ほどの調査結果でも、「検討しているが、決定はできていない」と回答した32.7%の高校生たちはむしろ健全です。逆にもう一つ心配なのは、実は「決定したし、変更しない」と回答した23.4%です。専門学校や、国家資格の養成課程の大学などへ進学を希望する人の多くがこの回答をしていると思います。専門学校は一つの道のプロになるための進学先として選ばれることもありますが、その場合にも卒業するときには関連する分野の仕事への進路も多く広がっています。専門学校に入ったらその道以外に変更しない、というわけではなく、ある程度視野を広く持って進学してもよいわけです。専門学校の職員の方には、「この道のプロになれる！」というのみならず、「そもそも色々な道があるよ」という説明も意識してほしいと思います。

**青木** 確かに、その幅広さがあれば高校生も安心して進路選択ができますね。進路情報を発信するにあたっては、高校生に安心感を持たせることが大事だと感じます。

**吉本** そもそも、高校から大学の期間というのはモラトリアムであり、試行錯誤の期間です。進路選択は1回きりではないので、「決定したが変更するかもしれない」「検討しているが、決定はできていない」の回答割合が増えることは悪くないと私は思います。

## 大学や専門学校は 教職協働で高校生にキャリアの展望を

**吉本** 大学などの学校広報においては、学問のその先の職業、実社会との関連をわかりやすく発信することが大切だと思います。また、高校生や高校教員に説明する場において、広報職員が入試の話しか把握していないのであれば非常に勿体ない。今は教職協働の時代と言われますが、教員としっかり対話をし、専門内容からその先に繋がる道まできちんと理解して説明する必要があります。

**青木** 高校生向けの説明の場に、教授や在学生在が同席するケースもありますね。

**吉本** たとえばある短大グループの取組では、短大在学生たちが“高校訪問キャラバン隊”を結成しています。高校訪問に、その高校出身の現役在學生を連れていくのです。そこで今の勉強内容や目指している道、場合によっては内定状況なども話してもらおう。そのような対話を通して高校生自身の歩む道筋やキャリア展望を意識させていくと、高校生はぐっと食いつきます。また高校生にとって身近な存在の人が話すことは、とても効果が高い。それは近年の様々な取組の効果を見てわかってきていることでもあります。学校広報においてはそういった工夫も必要です。

## 高校生のモラトリアムを認め、 評価する

**青木** 最後にマイナビ進学総合研究所サイトの主な訪問者である学校広報の皆様に向け、アドバイスはありますか

**吉本** 繰り返しになりますが、「この学部ならば必ずこれが目指せる」と限定的な安心感を与えるだけではなく、どの分野でもそれぞれに幅広い学びができることを示してほしいと

思います。幅広く学び、その先に幅広い活躍の分野がある、だから必ずしも絞り込んだ決意は持たなくてもいいよ、という安心感を、進学先となる学校は広く示してほしいと思います。活躍できる幅広さは、具体的であればあるほど良いでしょう。

また、高校生たちに進路決定を迫るのではなく、モラトリアムとして真剣に悩ませることも大切なキャリア教育ではないかと思います。高校生は何かにつかって、苦労し、社会を見て、そうやって進路を検討する。その支援を大人たちにはしてほしいと思います。

(取材日：2023年2月27日)